

六月八日(木)立教小学校第一回学校説明会が開催されました。一、二校時が授業参観。十時四十分〜十一時半↓説明会(講堂)その後、十一時半〜十三時半↓個別質問というスケジュールでした。優に八百世帯を越す方々のご来校に、講堂は満席。講堂に入りきれなかった皆様には、三階のA V室で映像をご覧いただくことになってしまいました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。申し訳ございません。

説明会は、一、本校の教育について(校長)二、本校のキリスト教教育について(チャプレン)三、入試について(教頭)という内容でした。今回の「つぶやき」は、子どもたち向けの講話をもとにして書いている回ではありませんので、本校の教育について、学校説明会でお話した内容をごくごくダイジェストにしてお伝えいたします。

「本校はどんな学校か?—男子校です。日本の私立の小学校で男子校は三校のみ。『男子校』と申しますか、『本校』の特徴は、言葉がキタナイ、ウルサイ、単純、雑駁(ざつぱく)、ズボラ、締まりがない、ケンカ、小競り合いが日常茶飯事。でもキラリと光る感性がある子たちなのです。」

この説明会もお祈りで始まりました。学校付きの牧師さんのことを『チャプレン』と言います。牧師さんのいる学校です。チャプレン

ンは教区から派遣されてくる『本物!』の牧師さんで、定められた任期があります。私立の教員は、ずっと同じ学校にいるゆえに、『井の中の蛙』になりがちです。それを外部からいらした、しかも牧師さんに、フレッシュな目で見ていただき、点検、助言、指導をしていただけるのは、なかなかのシステムだと自負しております。チャプレンは我々教員の精神的な支えでもあります。

一年三百六十五日、休みの日も、雨の日も風の日も、病気の日以外、毎日、日記を書く学校です。縦割りの教育をしている学校でもあります。子どもたちの日記から、担任がつかんだ情報で伝える必要がある場合は、縦割り担当の教員にも伝達され、人間関係がぎくしゃくしないように遠目で観察します。

毎度申し上げますが、男の子のDNAには、狩猟時代の記憶が刷り込まれているようです。動くものに反応する—教室に虫が飛んで来ると、無視しろと言っても無駄。下手をすると『おやじギャグ。』と言いなながら、目で虫を追っています。『ナイスミドルなギャグ』と言いなさいと言っても無視して、虫を目で追い続けるような子たちです。



獲物を集団で追い詰めていた名残で、集団になると舞い上がる者が出て、電車やバスでご注意を受けることになります。反面、集団

の中で認められることにより、人一倍力を発揮するような子、仲間のために命がけというような子どもも出てくる、こんな学校です。

学校は、心地よいサービスを提供する機関ではなく、社会性の訓練の場・教育の場です。サービスの語源はラテン語の『セルウス』だそう、その意味はなんと『奴隷』なんだとか。主人のために何でもかんでも従うことがサービスだとすると、子どもたちは学校の『主人公』であつても『主人』ではありません。

『主と従』の関係ではなく、保護者の皆様と我々が、ガッチリとタッグを組んでこそその学校です。本日来校の皆様の中にはおられないとは思いますが、『子どもの自己肯定感を高めるために、子どもの言う事は常に不足せず、肯定して育てています。』という考え方は、大きな勘違いです。他者の痛みに敏感に共感できる者になるために、まず人様にご迷惑をおかけしないような、しつげに協力していただけるご家庭のお子様、来ていただきたいと考えております。」

この後、「立教小学校は、子どもたちがノビノビしているように見えると、有難いお褒めを頂くことがあります。我々は神様から与えて頂いた一人ひとりの個性を大切にすることは当然のことだと考えております。ただ…」と、「個性」についてお話し申し上げましたが、この辺りで、得意の「寸止め」にて失礼いたします。(立教小学校校長 田代 正行)